

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 30 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520135

研究課題名（和文） ヴァーチャル・リアリティ・ネットサイト「社会」における表象文化論的調査研究

研究課題名（英文） Research of Cultural Representation in the Virtual Reality Websites "Society"

研究代表者

加藤 幹郎 (KATO MIKIRO)

京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授

研究者番号：60185874

研究成果の概要（和文）：芸術テキストの歴史に一貫した認識論的パラダイムなどありえない以上、個々の芸術のテキスト分析をとおして芸術とイデオロギーの不連続かつ連続する複数のコンテキスト（文脈）を構築考察する以外、芸術と人間の関係をさぐる方法はない。

研究成果の概要（英文）：Since there can be no single epistemological paradigm that is consistent in the history of art texts, there is no other way of exploring the relation between art and a human being than to construct and consider the continuities and discontinuities in plural contexts of ideologies and arts by carrying out textual analyses.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学

キーワード：芸術テキスト・コンピュータ系資本主義・表象イデオロギー論

## 1. 研究開始当初の背景

インターネット時代の絶大な浸透によって、かつては大多数の人間は読者でしか基本ありえなかったすべての時代の人間たちが、ブログ等の作者になった時代において、誰もが匿名で「作者」になり、自分の解釈、概念、思考等のテキストの書き手になることによって、個人的に基本いかなるテキストでも、すべて他者に読ませ、聞かせ、見せうる新規文化時代になったときに、誰もが何でも書き、描き、それを基本、誰もが読みうる（見うる）時代には、書き手（創作者）と読

み手（解釈者）のレベルが、わずか20年前から90パーセント以上、減退する時代になった今日、それを資本主義との関係で、どのように人間の思考力と想像力と創造力を活性化しうるのかが問題でした。

## 2. 研究の目的

コンピュータ上で世界の膨大な人間同士が経済と知識を簡単に交換活性化する現代において、かつての紙書籍による創造と想像と概念と理念の活性化が終結した以上、現代のコンピュータ経済文

化時代を大多数の壮大なインターネット上の心的交流と情報交換の中で、20世紀における人間の本質の創造と想像のテキストの実行と活性化を21世紀の新しいテクノロジー世界の中で、いかにはかりうるかをリサーチすることが研究目的です。

### 3. 研究の方法

世界中の膨大な HP 内の文化的・経済的テキストを検索し、それらの文章や画像の内容が、かつての膨大な図書館に貯蔵されていた膨大なすぐれた紙書籍（書物）の内容との比較を実施し、それなりにリアリステックに視聴できるコンピュータ産業下の経済的、理念的アスペクトを、1990年代以前の、コンピュータ時代以前の、資本主義経済と書物や画像による言語視聴覚文化の普遍化による20世紀の人間の芸術（絵画、音楽、小説、映画、写真）との比較文化研究です。

### 4. 研究成果

(1) 世界の本質を「正しく」規定することなど誰にもできないのであるから、わたしたちに問われていることは、いかに多くの創造行為者が、その不可能な問題に個別に立ち向かった証としてのテキストの意味を真摯に分析できるかどうかということにある。本研究に登場するすべての作家たちはイデオロギーに自覚的であろうとなかろうと、みずからの創造行為に真摯に取りくんでいる点では変わりはない。その成果としてのテキストを個別に分析することは煩瑣な議論におちいることを意味するものではない。人間世界に典型的なものはあっても普遍的なものなど存在しないのであるから（あるのは変容しつつも支配的たりうるイデオロギーであるから）、人間の固有の生活経験を貧困化する無味乾燥な一般的、抽象的、観念的議論では芸術の真価を把握することは不可能である。膨大なる細部の検討なしには、芸術の水準にいたるテキストの価値を解明することはできない。それは人間精神の毛細組織を実感することなのである。テキストにかぎらず、一個のテキストは暫定的であるがゆえに、つねに複数の解釈にゆだねられる。複数のテキストを錯綜した、それじたい特定しがたいコンテキスト（「現実」史にはなりきれない文脈）に照らして相互解釈することによって、ひとつのテキストからまがりなりにも意味の多元性を引き出すことが可能となる（あるいは逆説的に芸術テキストは

既成のコードから逸脱するがゆえに暗黙の意味の生成不可能性を実現するであろう）。

(2) 人間社会に秩序と安寧を保証すると言われる絶対正義という「普遍的概念」もまた仮設的総体世界内のあまたある幻想的構築物のひとつにすぎない以上、正義もまたそれじたい多様な解釈にゆだねられるイデオロギー的産物にすぎない。したがって本研究で取りあげられるテキストは称賛されるべき独創的なものから、批判されるべき通俗的なものまで、「正義」的テキストから「不正義」的テキストまで多種多様である（その意味で本研究は異種混淆主義的であるし、それじたいイデオロギーから無色であることもありえない）。ただし批判される対象は、テキストそのものでも、その作者でもなく、当該テキストが生成し受容される、テキストの意味と解釈を一元化しようとする同時代的イデオロギーである。あるテキストが批判するに値するとすれば、それはそのテキストが依拠しようとした社会状況の必然的産物として、集団的嗜好ないしイデオロギーの光景化に成功しているからである。それは隠蔽的な支配的社会通念に擬議をさしはさもうとしない映画作家と大衆観客との共謀の所産というわけではかならずしもない。一般的に「価値」に先立つ事実は存在しないのであるから、ある時期に属する集団精神にもっとも深く浸透する公認追従的なテキストは批判的観点から論究に値するはずである。複数の多孔質映画テキストの内在的分析をとおして支配的社会通念の変容プロセスをさぐることは、映画テキストが社会的イデオロギーのなんらかの表象である以上、不可能ではない。

(3) 人間の創造的行為は、同時代的イデオロギー（大多数の社会構成員がみずからの情緒安定のために暗黙のうちに集団的に承服せざるをえない真偽定からぬ擬似制度）を意識するにせよしないにせよ、なんらかのイデオロギー的前提から逃れることはほとんど困難である。テキストの美学的、技術的巧拙とは関係なく、ほぼすべての物語テキストは理想的な（ユートピア的な）ものであろうが陰悪な（ディストピア的な）ものであろうが、フィクションであろうがドキュメンタリーであろうが、なんらかのイデオロギー的呪縛のもとに成立するしかない。人間にとってイデオロギーとは、たんなる権力統制や防衛手段や非人道的暴力

(宗教的イデオロギーですら基本的に暴力を否定することはない)の正当化をはかるものばかりでなく、しばしば反駁の余地のない社会的「現実」という公然たる幻想世界である(非芸術映画を見て聴くことが大衆にとって「気晴らし」になるのは、そのためである)。イデオロギーは政治的、経済的、科学的、伝統的、革命的、哲学的、宗教的、文化的、情動的諸相下で現実社会に蔓延するため、人間はイデオロギーに囚われているかぎり、たとえどんな理不尽な事態に見舞われようとも、そのなかで憩うこともできる。支配的イデオロギーに埋没している人間は、みずからの人生の昏迷は回避できるかもしれないが、まさにそれゆえに多種多様な他者の人生にたいして倫理的善行をおこなえとはかぎらない。

(4)すべての人間にとって、それなりのイデオロギーにそまってさえいれば、人間は非人道性の社会的表象であれ実践であれ、その正当性を鵜呑みにすることもできるのである。大衆は伝統的、権威的イデオロギーにたいしてはほとんど修正力をもたないため、既成のイデオロギーにひびをいれ、世界の表象と理解を刷新する芸術テキストの意義についてもしばしば無理解である。しかし理性の減退と感性の衰退に歯止めをかけるものもまた芸術テキストの機能のひとつである。イデオロギーは仮設的総体世界の住人たる人間の精神的紐帯となりうるが、そのイデオロギーになじむ者もなじまない者も、芸術によってはじめて仮設的総体世界からの一時的脱却をはかることができる。

(5)多くの芸術作家たちは、世界芸術史と日本芸術史の展開にともなう製作技法の支配的法則を採用するにせよ、あるいはそこから距離をおいて独自の製作技法を探究するにせよ、いずれにせよ一般に可視的な芸術と不可視的なイデオロギーのはざままで人間精神表象の多種多様な形式と内容を模索する者たちである。創造的行為が芸術と呼ぶに値するものになるのは、それが支配的イデオロギーから一時的に離反するときである。芸術テキストが、選別と排除を人間社会に強いるイデオロギーから完全に自由になることは不可能であろうが、一瞬でも、わずかでもよいから既存の理性的、感性的パターンから離脱できれば、それが芸術生成の要となるであろう。偏見や予断や信念や慣行や公準そして独善的

刷りこみ、そうしたものを刷新しないかぎり芸術テキストは意味をなさない。真の芸術テキストとは、ほとんど同語反復的に聞こえるかもしれないが、芸術史と目されているものの刷新(芸術と呼ばれている既成の理念体系からの一時的乖離、了解可能と思われていた世界の意味にたいする擬議)であり、かならずしも道義的高潔心や審美主義などと随伴するものではない。むしろ刷新された過去の芸術テキストそれじたいも、大過去の芸術テキストを刷新したものである以上、芸術史のなかで刷新されつづけるテキスト群それじたいは基本的に芸術的真価を失うことはない。

(6)歴史的イデオロギーはたんなる過去の遺物にとどまらず、たえず変容しつづけながら今日の問題として人間をつつみこみ、人間精神の理想と現実のはざまに浸透している。なんであれイデオロギーの巨大な流れから逃られる人間など存在しないであろうが、それでも既成のイデオロギー(価値の範例)から距離をおこうとする映画作家の創造的実践は論考に値する。テキストの芸術性はそこに起因する。さて本研究は不連続な連続のモニタージュからなっている。相対的に定式化されうる「正典」映画史でもなければ(人間の実践の歴史の厳密な記述の試みは、たとえ錯綜した膨大な典拠的資料[公文書から日記まで]を実証的に整理しえたとしても、それらは変容をとげつつも永続的に人間を蒙昧性のなかに溶かしこむイデオロギーのなかにか成立しえない[事実の記述は過去における不可解な疑惑の解明という特定の文脈内でなされないかぎり歴史叙述たりえない]以上、歴史(イストワール)叙述もしょせん物語(イストワール)となるしかない)、また本研究はテキストの肌理を度外視した抽象的映画理論でもない。

(7)芸術テキストの歴史に一貫した認識論的パラダイムなどありえない以上、個々の芸術のテキスト分析をとおして芸術とイデオロギーの不連続かつ連続する複数のコンテキスト(文脈)を構築考察する以外、芸術と人間の関係をさぐる方法はない。しかも芸術とイデオロギーにはひとつの大きな共通点がある。両者ともに実用科学などとは異なり、客観的妥当性などもちえないということである。芸術とイデオロギーは人間の生活経験のうえにしか成立しない。それでも芸術を宗教的イデオロギーから乖離しさえすれば、芸術は一般に受容される生活経験を持続的に刷新する精神的価値をもちうる。それは実用科学(たとえば原発や原爆)が利便性と災回性をあわせもつこととは対

照的である。本研究の分析スタイルが流動的なのは、分析の対概念たる総合（体系）もまたひとつのイデオロギー的産物にすぎないからである。そもそも理路整然たる人間の歴史など構築しようがあるまい（それはせいぜい記念碑的歴史叙述の一次元にすぎない）。芸術の真価は個別的テキストの錯綜的生成プロセスにしか見出せない。なぜなら芸術とは漸進的変化だからである。それは発展の歴史的过程上にはけっして統一的に整理されない、個別的事象の蓄積にすぎない。しかし個々の芸術的テキストといえども、それが作家独自の規範によって創造されるものだとも言いきれない。たしかに芸術家はみずから呪縛されているイデオロギーから離脱しようとするであろうが、芸術家の個人的規範にすら、なんらかのイデオロギーが混在していないとはかぎらないからである（テキストが生産される時代状況からテキストが完全に無縁であることなどありえないであろう）。社会の表象体系は、個々のテキストとそれを産みだす作家の個別性を過度に単純化（抽象化したり感傷化したり）する。世界をあますところなく記述することなど個人であれ集団であれ、いかなる方法であれ不可能であるのだから、断片的テキストの内部で作家は一般性と固有性のあいだを揺れ動いている。その足取りを個々のテキストの連鎖と系譜（コンテキスト）のうちに読みとることができれば、ただたんに過去のすぐれたテキストの意味を理解するだけでなく、過去のテキストがはらむ諸問題がいかに現在の（あるいは未来の）テキストをとおして新たな展開をもたらすことができるのかを究明できるにちがいない。

(8) かつて映画館は全世界で毎週、何億人もの観客を動員する特権的な場所だった。そのため映画という視聴覚媒体は、当初、20世紀を代表する大衆娯楽商品とみなされていた。しかし映画が誕生してゆくに1世紀を閲した現在、映画が他の複製技術媒体（写真や小説）同様、たんなる大衆消費財にとどまらない、個人の深遠な想像力をかきたてる芸術と、個人を社会構成員たらしめるイデオロギーとの複合的所産であることは疑いをいれない。映画が写真や小説や演劇といった先行表象媒体の影響を受けながら、大衆消費物から知的構築物へと、いかにみずからの製作過程を洗練し、創造的テキスト（織物）として成熟していったのか、そしてそのことによって、いかにして映

画が20世紀から21世紀の芸術とイデオロギーを具現するメディアムとなりえてきたのか、そうした問題を世界の映画作家たちの個々のテキストをとおして分析するのである。

(9) むろん、いかなる分析手法を駆使してみても無窮の芸術の多元的意味を世界の複雑性と照応させることなどできない相談であろう。それでも芸術テキスト固有の活力は、対抗するイデオロギーの一元性と固着性を超克することができるのである。その意味で、芸術についての「実証的真理」にもとづくたとされる幻想的意味とは無縁であり、テキストにおける芸術とイデオロギーの錯綜を具体的に考察するものでしかない。もっとも「現実」はイデオロギーの多重的成層によって成立している以上、個々のテキストから出発し、さまざまなコンテキストを経たのち、芸術の真価が年代史的集合体に還元しきれないかぎり、ふたたび個々のテキストへとそれぞれ回帰する回廊である（そうやってはじめてテキストは硬化することなく、さらなる意味を観客に追補的に知らしめる）。人間は「現実」をありのままに見ることなどできない。理性的にも感性的にもつねになんらかのイデオロギーの色眼鏡ごしに「現実」を把握するしかない。それゆえイデオロギーの所産たることを避けえないテキストをとおして「現実」なるものを観察し、また支配的イデオロギーに対抗する芸術的実践としてのテキストをとおして新たな世界の「現実」の多面的構築をコンピュータ生活経験に準じて模索したものである。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 田代真、アニメーション映画における景観と俯瞰 宮崎駿のアニメを中心に、国士舘大学人文学、査読有、2号（通巻44号）、2012、127-139
- ② 田代真、映画テキストにおける見えないこと、物語研究、査読有、11巻、2011、29-39
- ③ 田代真、柳町光男『カミュなんて知らない』における「不在」の構造、人文学会紀要、査読有、42巻、2010、1-22

〔学会発表〕（計1件）

- ① 加藤幹郎、世界映画史におけるモーショ

ンの開始と終焉—リュミエール、ミッチェル&ケニヨン、ロブ=グリエ、タル・ペーラ、日本映画学会、2012年12月1日、大阪大学

〔図書〕(計3件)

- ① 加藤幹郎、岩波書店、列車映画史特別講義(芸術の条件)、2012、206
- ② 加藤幹郎、岩波書店、日本映画論1933-2007 テキストとコンテキスト、2011、463(2段組み)
- ③ 加藤幹郎、岩波書店、表象と批評(映画・アニメーション・漫画)、2010、238

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

加藤 幹郎 (KATO MIKIRO)  
京都大学大学院人間・環境学研究科・教授  
研究者番号：60185874

### (2) 研究分担者

田代 真 (TASHIRO MAKOTO)  
国士舘大学文学部・教授  
研究者番号：90221382

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：